慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	池田信著 日本社会政策史論
Sub Title	Makoto Ikeda, History of Japanese social policy thought, 1978
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1979
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.72, No.1 (1979. 2) ,p.100- 101
JaLC DOI	10.14991/001.19790201-0100
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19790201-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

池田　信著

『日本社会政策史論』

(1)

この度，畏友，池田信氏の長年の研究の蓄積の成果である「日本社会政策思想史論」を得て，同じ社会政策あるいはその思想史に関心のある者として誠に喜びに耐えない。池田さんはすでに，大前朔郎先生との共著「日本労働運動史論」日本評論社，1966年，および『日本機械工組合成立史論』日本評論社，1970年，を出版され，その実証的なアカデミックなお仕事は，学界でも高く評価されていた。わが国ではすでに風早八十二氏の「日本社会政策史」（日本評論社，1937年）のように，すでに古典となった名著をもっているが，不思議なことに『社会政策思想史』というのは，大河内一男東大名誉教授の『独逸社会政策思想史』を例外とすれば，まったく存在しなかったと云ってよかろう。その意味で，本書はまず，日本の経済学研究史の上で，ひとつのパイオニア・ワーク，いわゆる「開拓的・先駆的業績」としての地位をしめることになろう。近い将来，私も年来，その研究対象としてきたイギリスについて，やはり社会政策思想史を書こうと考えていたので，この著作の出現によって大きな刺戟をうけたことはいうまでもない。そして今年度（'78年度）の大学院の授業で，あるいは11月初旬に開かれた「経済学史学会」での報告に際しても，大いに利用させて戴き，且つたくさんのことを教えて戴いたことを，まず著者に感謝したいと思う。

そこで，この稔り豊かな御労作を読んで感じたこと，あるいは疑問に思うことをのべ，いずれかの機会に御教示をえたいと考える。

まず本書の構成であるが，第一部　起点，第二部　形成，第三部　展開，というように，社会政策思想の起点を，明治20年代末期における職工条令に見出す。これは，この条令が資本の本源的蓄積期における熟練労働力の育成・確保を図るものであり，労働者個人の法的な市民的自由を基本的に認めた上で提案された職工条令は，やがて金井延，桑田熊蔵等の批判によって，労働者保護法としての工場条令制定の運動へときりかえられていく。著者がこの時期を起点と考えているのは問題はなかろう。

著者が本書において展開している論理の運び方は，ひとつは，明治20年代末，「職工条令から工場条令へ」という起点から出発して，年代的に第1次世界大戦の時期にまで及び，いわば問題史的に年代を考慮して論述されていることである。と同時に著者は，社会政策思想の展開を，人物を中心に把握し，さまざまな群像を描き，彼らの相互問題を追求し，社会政策史論としての体裁を維持しつつ，彼らの思想の内面にまで立ちいって分析を行い，相互に比較検討を行っており，その文献史的蓄積は，永年の研鑽の賜物として尊敬の念を禁じえない。

わが国における社会政策思想の形成という点で，社会政策学会の初期に画期的な役割を果したのは金井延と桑田熊蔵であろう。著者はこの時期における社会政策思想形成について，「上からの改良」と「下からの改良」という2つの契機をとりあげ，関谷耕一氏が，日本社会政策学会をもって，「上からの社会政策」のみを説き，「下からの社会政策」を否定したという点を批判しておられる（本書，78～82頁参照）。筆者は，この問題が，本書における重要な論点を形成するものと考え，まずこの問題について意見をのべることにしよう。これについてはすでに関谷耕一氏が，池田さんの批判をほとんどうけいれる形で，その「社会政策学会小史」の再録版（社会政策学会史料集成別巻I，社会政策学会史料）のはじめに要約されている。

私自身，桑田熊蔵について研究をはじめたばかりであり，充分な認識をもっていないので，確信をもっていうことはできないのだが，著者がふれている史料によれば，桑田の云うように，自由的社会改良主義と国家的社会改良主義という二種類の社会改良主義があり，それらがそれぞれ，「下からの社会改良」，「上からの社会改良」として桑田によって説かれたことは事実であろう。従って，社会政策学会の有力なメンバーであった桑田の思想と行動からすれば，学会が「下からの社会政策」を否定したとする関谷氏の見解が事実を正しく認識していないという点で，池田さんの批判は的を射ていると思う。しかし問題はその点にあるのではなく，その後の社会政策学会の活動を通じて，桑田のいうところの自由的社会改良主義（下からの社会改良）が国家的社会改良主義（上からの社会改良）とどのような絡み合いを展開するのか，という問題がある。このモティーフで本書が一貫していたならば，きわめて問題提起的であったろうと思うが，筆者が読んだところでは，そのような問題の建て方ではないと考えられる。

日本における社会政策思想を考察する場合に，たんにその生成と発展，そして展開の筋を追求するにとどまらず，日本における社会政策＝社会改良思想の未成熟さは，その原因がどこにあったのか，この点が，本書のモティーフとして追究されるべきではなかったろうか。部分的には，この問題についての示唆に富む叙述がみられるが，全体としては，「桑田の社会改良主義」の問題提起が継承されているとは云い難い。

きわめて概括的な整理を行うならば，著者も明らかにしているように，主として日本社会政策学会に結集した思想家たちは，金井延によって典型的に代表される講壇的社会政策論者と比べて桑田熊蔵はいわば自由主義的社会政策論者であり，添田寿一は「上からの社会改良」を担う官僚的社会政策論者と規定することができよう。これにたいして高野房太郎，佐久間貞一および片山潜等は，「下からの社会改良」を担う人々であり，桑田はその中間にあって，これら双方の調整に努力していたといえないだろうか。安易に左派，右派および中間派というような区別を行うことには問題があるが，こうした関係は，社会政策学会の活動が本格化した明治40年以後も持続し，とくに福田徳三，河上肇を中心とするマルクス経済学研究の深化とともに社会政策の理論も微妙な影響をうける。著者が考察の対象としているのは主として1914年以前の時期であり，経済学の理論的影響は，社会政策論には直接的にはあらわれてはいない。日本の社会政策論は，経済学的な理論構成の上に立って労使関係を分析することが少なく，この時期にドイツ新歴史学派の影響が根強いため，価値法則にかかわらしめて社会政策論を構築するまでに至らなかった。しかし福田徳三や高野岩三郎には，明らかにマルクス主義の影響が感じられ，彼らの「下からの社会改良」を支えていたようにも思われる。帝国主義と社会改良を社会政策の楯の両面と考えた金井延の社会政策論とは，その意味で対照的であったといえよう。私は，社会政策論の背後に横たわる新歴史派経済学とマルクス主義との対抗関係について，より深く比較検討されたらなおよかったろうと思う。

しかしこれは，これ以後の時期においてもっともよく妥当する問題であり，今後，著者によってなしとげられることを期待したい。

最後に，わが国の社会政策学会は，ドイツ社会政策学会が，1933年，ナチス権力による圧迫によって解体したのとは対照的に，みずから内部的な要因によって衰亡してしまったことについて，私はひとつの意見をもっている。わが国においては，下からの社会改良思想の力が弱く，理論より以前に，思想そのものが解体し，経営家族主義的思想のなかに埋没させられてしまったのではなかろうか。かつて「下からの社会改良」を支えた鉄工組合や日鉄矯正会の運動は，経営社会政策によって吸収され，社会政策学会の発展のなかで，組合運動が，社会改良をおしすすめる主体たりえなくなった。だとすれば，われわれは経営家族主義とは，どのような思想であるのか，たとえば，労資協調主義とはどのように異なるのか，このような点についても著者によって，さらに明確にされることを期待している。

とにかく，本書は，明治30年代から大正半ばにかけて日本の社会政策思想について，きわめて多面的に分析した力作である。きわめて実証的・史料的であるため，理論的な整理に欠けるうらみがあるが，その旺盛な研究心，とりわけ卓越した実証的精神には敬服せざるをえない。おそらく大正末期から第2次大戦に至る社会政策思想史の研究も進められていると思うが，今後の活躍を期待するとともに，本書を塾生諸君のできるだけ多くが読まれるように期待する。〔1978年，東洋経済新報社刊，A5判，288＋vi，2,800円〕

飯田　鼎
（経済学部教授）